

場の本

僕がこれまで関わってきた場と、これから作っていくこうと考えている場について語ることで、場とはどのようなものであるか、というようなことが少しでもわかりやすくなればと願ひ、書きました。話があちらこちら飛ぶし、文体も錯綜していますが、場というのはたぶんそういうものでもあると思うので、ご理解をお願いいたします。「幼少期に遊んだ公園」「高校の時にどはまりしたチャット」「二十の時から通い始めたカウンターバーでの三年間」「バーの店主としての四年四ヶ月」「お店ではないオリジナルの《場》をつくり運営した二年九ヶ月」「これから始めようとしていることについて」について、書いていきます。

二〇一六年八月二十八日初版発行（日曜口）にて

二〇一七年五月七日ウェブ版発行（夜学バーHPにて）

なぜ僕は《場》なるものにこだわり、バーに立ったり、「おざ研」というものを作ったり、これからも何らかの場をつくり続けようとするのか。そういえばまとめたことがなかったです。

関わってきたいろんな《場》を一つ一つ振り返りながら、場というものがどういいうもので、僕はどういいう場を作ってきて、これからどういいう場所をつくっていくつもりなのか、書いてみます。

《場》に興味のある人は、何かの参考にしてくださると幸いです。

●すべての原点、「公園ジプシー」

小学校低学年のころ、友達がいなかった。

それがすべての原点である。

「友達がいなかった」から始まる話は、当然「友達がほしい」を経由する。そのあとどこに行くのかは千差万別で、僕の場合は《場》というもののほうへ向かうわけだが、なぜそうなるのかというと。

友達がほしい、と思った僕は、窓の外を眺めていた。

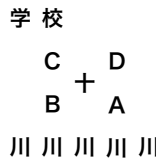
我が家は白と緑の十数階建てマンションの四階である。

唐突ながらここで、十字に切って四分割した豆腐か何かを思い浮かべてください。四分割した豆腐を上から見て、右下がうちのマンション(A)。左下が県営の集合住宅(Bとする)。左上は市営の集合住宅(C)。右上も市営の集合住宅(D)。

すなわち、包丁で入れた切れ目を道路とすると、十字路に区切られて四つの集合住宅が右下から時計回りにA B C Dと並んでいるわけだ。ちなみにAとBの下側には広い河川敷を持つ川が流れていて、BとCの左側には線路があり、DとAの右側には大きな国道があつて川には橋が架けられている。えー……とてもわかりにくいと思いますが、要するにこの四つの建物は、川と線路と国道によって三方を囲まれて

いて、もちろんそれらを越えれば小学校の学区が変わるので子供たちはほとんどその内側でのみ暮らすことになりました。隔離されているようなものです。残る一方(上側)はどうなっているかというと、左上のCと隣接するように小学校があるため、子供たちはそれよりも先へはあんまり行かない。模式図にしてみます。

国道 国道 国道 国道 橋 国道 国道



線路 線路 線路 線路 橋 線路 線路

何が言いたいかというと、僕の生活ゾーンはこのA B C Dの周辺だけで完結していたのだ。A B C Dは集合住宅なのでそれぞれに公園が附属していて、うちの小学校の子供たち、とりわけA B C Dに住んでいる子供たちはだいたい、このA公園 B公園 C公園 D公園のいずれかで遊ぶことになる。

僕の住んでいたAのベランダは右の図でいえば上のほうを向いていて、そこへ出ればB C Dが一望できる。小学校も見える。ちなみにテレビ塔も見えた。テレビ塔だけ過去形なのは栄(名古屋最大の繁華街)の近くに高いビルが建つて遮られたためである。永遠に許さない……。

そんな見晴らしのいいベランダなので、各公園の様子とか、公園から公園へ渡り歩く子供たちの様子などが、まるっと視認できるわけだ。子供たちは、ずつと一つの公園で遊んでいるわけではない。公園ごとに広さや形や遊具が違うので、それによって遊ぶ内容も当然変わってくる。鬼ごっこやケイドロなら地形の複雑なA公園(またはAの建物内部)、アスレチックがあるのはB公園、巨大すべり台はC公園、ボール遊びなら最も敷地の広大なD公園、という具合。それで子供たち

はAからB、BからCへと、一日のうち何度も公園を行き来する。移動の途中で友達に会えば自然に「一緒に遊ぶ？」となったりするし、別の公園で遊んでいたグループと合流して遊ぶこともある。遊んでいるところに誰かが来たら「入れて」とか「入る？」が行われる。僕が目をつけたのはこの《制度》である。

友達のいない僕の家には、誰も「あそぼ」と言いに来ない。言いに行く相手も当然いない。そして友達がいらない最大の理由が「引つ込み思案」であつた僕には、「入れて」と言う勇氣だつて、ない。

でも、友達ほほしい。誰かと一緒に遊びたい。どうしたかというところ、ペランダから外を眺め続けたのである。ずっと見ていた。

それで誰か、一緒に遊んでくれるかもしれない集団を見つけたら、外に出て偶然を装つてそこまで歩いて行くのである。

「入れて」ということは言えないから、「入る？」とか「一緒に遊ぶ？」を待つ。あるいは、なんとなく自然に、シュツと、その輪の中に入つてしまふ。わざわざ「あそぼ」と言い合う仲ではないまでも、学校では毎日のように会つているわけで、知らない相手ではない。けつこう入れるのだ。シュツと。で、帰り際に「明日も遊ぶ？」とか「明日はB公園ね」なんてなつたら、翌日はもう外を見なくてもいい。

それでしばらくはその子たちと遊ぶのだが、そういうふうにはシュツと入つた集団とは、数日経つと離れてしまふ。「あそぼ」と勧誘されることはないのだから、帰り際に約束をしない限り、次はない。売れないフリーランス業者のようである。

それでまた外を眺める。

僕が考える《場》というものは、基本的にこういうものである。

原則的にと言つてもいい。

子供たちが遊ぶなから自然発生的にできあがつた《制度》には、どこか普遍的の匂いがする。

場に「入る」ということは、物理的な行為ではなくて、「入りたい」という願いと、「入つてもよい」という判断が合わさつた時に、実現するものだ。「入りたい」だけで「入つてもよい」がないと、その人はその場から浮いてしまふ。同じ空間にはいても、同じ場を共有できない、ということになる。それでなんだか、居心地が悪くなる。

場を「出る」ということが、ありうるのか、よくわからない。あるとしたら、いつの間にか出ていた、というような感触のものであろう。あるいは、「入れない」という事態に直面した時に、初めて「出た」ことになるのかもしれない。でも、「入れない」と思つた時に目の前にある《場》と、前に入つていた《場》とは、たぶん違う場である。場は流動的で、常に形を変えている。だからこそ、いつでも「入る」「入れる」ことができるし、「出る」ということもいつの間にか起こる。「帰るね」という言葉があつても、なくても。

場の存在する場所だつて、どんどん移動していく。A公園からB公園へ、子供たちが動くとき、子供たちとともに、彼らのいた《場》もいつしよに、移動している。

場とは物理空間ではなくて、人のいるところが曖昧に場なのである。(人がいても、場にならないことはあると思う。)

原点は以上のような、小学校低学年の「公園ジプシー」だが、このような生活は高学年になつても、中学生になつても続いた。行動範囲が広がらなつても、結局は学区内をぶらぶらして、そこらへんで遊んでるやつと合流して適当に遊ぶ、というスタイルのままだった。そのせいか中学時代の僕は友達がたくさんいた。学年は8クラスあつて三百人ほどの生徒がいたが、男子はほぼ全員と会話ができたし、女子でもたいていは互いに知つていた。不良とも地味な子たちとも誰とでも遊べた。一緒に遊ぶために必要なのは、同じ場を共有できるか、共有しようとする気があるかどうか、それだけだ、というのは、その頃によく理解した。

悪いこともできたしゲームも好きだし本も読んでいた僕は、けつこ

ういろんな人と「場の共有」ができたのだ。多趣味だったとか、手広かったというよりは、柔軟だったってことだと思ふ。場に応じてずっと調整することができた。

それはたぶん、幼い頃からの必死のジプシーで身につけてきた能力だろう。

こういう内容のことは橋本治さんが『ぼくたちの近代史』という本の中で「原っぱの論理」という言葉で語っている。興味があればそれぞれもご参照を。

●月に一五〇時間をゆうに費やした「チャット」

太古の昔、インターネットはいわゆる「ダイヤルアップ接続」によって行われていた。現在は「インターネット専用回線」しかないようなものだが、かつてインターネットといえば「電話回線を使用する」ものだったのだ。だから、電話をしている間はネットができないし、ネットしている間は電話が使えない。ずっとインターネットをやっている家には、いつ電話しても「通話中」になつてしまつていた。

電話回線を使うということは、繋いでいる間はずっと「通話料」が発生する。当時は「オフライン作業」という言葉があつて、ホームページを開いたらいつたん回線を切り、オフライン状態にしてからゆっくり閲覧することが常態であつたわけだ。

我が家も当然、かつてそうであつた。高校の途中くらいまでそうだった。ところが僕は高校に入学してすぐ、「チャット」にはまりってしまったのである。

このへんは詳しい記憶がないし、お金を払っていたのは自分ではないので曖昧なところも多いのだが、僕がチャットにはまり始めた頃、賢明なお父さんはすぐにニフティの契約を「月に一五〇時間まで定額」というものへ変えた。一五〇時間までは繋ぎ放題なのだが、それを越えるとオーバーした時間ぶんの料金を徴収しますよ、ということだ。ところが当時の僕にとつて、一五〇時間というのは絶妙な線だった。

三〇日で割れば五時間である。一日に五時間チャットをすればオーバーするのである。一日に五時間のチャットを、僕はたぶん余裕でやってた。

学校に行つて部活をやつて、帰れば六時か七時である。それから十二時まで起きていて、そのほとんどをチャットに費やすとして、たとえば五時間。ちよんどうよさそうな気もするが、チャットにはまつている人間が十二時に寝るわけではないし、休日是一日中ログインしているに決まつている。

月末には決まつて一五〇時間を使い果たす。どうしたのかといえば、当時登場したばかりの「インターネットカフェ」である。「ネカフェ」なんて呼び方がまだ（たぶん）なく、チェーン店もほとんどなかったであろう時代、駅前に一軒だけ、個人経営のネットカフェがあつたのだ。一説によれば漫画喫茶の文化は名古屋から広まつたものらしいので、インターネットカフェの普及も割と早かつたのかもしれない。

なぜ僕はチャットに取り憑かれてしまつたのだろうか？ 答えは今にして思えば明瞭で、そこが僕の理想とする《場》の在り方に近かつたからだ。

僕が通つていたのは、「ドラえもんの世界」という個人ホームページのチャットで、「とも（または RUI）」という関西に住む大学院生（当時）が運営していた。ドラえもんチャットということで、中学生から二十代前半くらいまでが主な入室者だった。小学生もわずかだいた。

当時（二〇〇〇年）のインターネットは、まだ限られた人だけのものだった。正確にいうと、この二〇〇〇年あたりを境にしてどんどん大衆化していく（爆発的に利用者が増えていく）ので、すでに「限られた人」とは言い切れないのだが、それでもまだまだそういう側面はあつた。どういふことかというところ、九〇年代までにインターネットで遊んでいたのは、「お金」と「知識」と「技術」と「好奇心」があつた人だけだったのだ。

僕が小さい頃はまだ、家庭にパソコンがある、ということが普通で

はなかつた。財力がある、というか、「そこにお金をかける」という必要や発想がある人だけが、パソコンを持つていた。まだ「パソコンを仕事で使う」という人は多くなかつたし、そういう人も家庭ではなく職場のパソコンで間に合わせているのが普通だった……と思う。

その中で「ネットで遊ぶ」という人や、「子供にネットをやらせる」という人となると、かなり少なくなつたはずだ。我が家には機械好きのお父さんのおかげで八〇年代からコンピュータがあつて、NECのPC98がやつてきてからは僕も使つていた。小学三年生の時（一九九三年）には発売されたばかりの『RPGツクールDante98』というソフトでゲームを作つていた（つまり文章も打つていた）ので、知識も技術も好奇心もかなりあつたほうだろう。

九〇年代まではブログのような手軽なサービスがほとんどなく、インターネットで何かを発信するためには、自分でHTMLやFTP等を学ぶ必要があつた。それができるのは「本気」の人間だけである。苦勞して作つたものを人は大切にしますので、そこに書かれる言葉には魂がこもつていた、こもりがちだつた、と思う。HP作成支援ソフト（ホームページビルダーなど）もあつたが、大概（というかたぶんすべて）有料のシェアウェアだつたので、軽い気持ちではできない。

そもそも、パソコンを買つて、インターネットをすることにお金が必要だつた時代である。今だつてお金をはかかるが、現在インターネットは「生活必需品」だから、「お金を出して当たり前」。ところが当時、家庭におけるインターネットとは「嗜好品」に過ぎなかつたのだ。さつきも書いたが、仕事でパソコンを使う人は職場でやればよかつたし、家で作業をしたい人でも、なにもインターネットに繋げる必要はない。だつてフロッピーやMO（懐かしい！）で十分事足りたのだから。

話が長くなって恐縮だが、ともあれかつてインターネットというのは、「金と知性のある物好き」がするものだつたのだ。（違つたら教えてください。）だからチャットにいる人たちも、基本的にはお行儀がよかつた。二〇〇〇年の、最初のほうまでは、ドラチャ（僕がいたドラえもんチャットのこと）もそうだつた。まるで樂園だつたのだ。

ドラチャには、いつもたいてい人がいたし、いなくても、入室すればすぐに誰か来た。夜中でも待つていれば来た。ユーザは少なすぎず、多すぎず、ちょうどよかつた。ドラえもんの話題はたまに出るくらいで、それぞれ自分の話をしたり、世間で話題になつていくことについて話したりした。いちばん盛り上がり上つたのは、くだらない冗談を言い合うことだつたかもしれない。まったく関係のない赤の他人だから、共通の話題というと、言葉遊びやくだらない話になつていく。下ネタはほとんどなかつたし、恋バナも多くはなかつた。これは「ドラえもん」という旗の下に集つた人たちだつたからだと思う。ドラえもんといえ、くだらないギャグだからなあ。それこそ言葉遊びとか。

どういふ話になるか、というのは、その場にいるメンバーによつて決まる。あるいは、誰が何を言ひ出すか、それに対して誰が何と答えるか、という、流れによつて刻々と「決まつていく」。「今日は〇〇の話しよう」なんて当たり前だけど誰も言わなくて、なんとなく文字を打つていこううちに、自然にどこかへ流れ着いていく。これはまさに《場》だと思ふ。

チャットに「入る」ことや「出る」ことは自由にできるけど、その《場》に入つていくことは、簡単ではない。自分の発言にちゃんと気を配り、相手の発言をちゃんと読み、みんな楽しんで話になるよう、言葉に言葉を重ねていく。それはけっこう高度な技術で、ドラチャで仲良くなつた人たちは、そういうことが本当に自然にできる人たちだつた。だから楽しかつた。《場》をつくる、ということはああいうことだ、と、今でもはつきり確信している。

ドラチャには「親友」といふ言葉を捧げたい人が何人かいたし、今でも仲良くしているやつもいる。死んじやつたのもいるし、探してやるのに再会できないものもあるけど、みんなを永遠に忘れることはない。年齢も性別も住んでる場所も関係なく、みんな仲良くタメ口で喋つていた。完璧に平等な空間だつた。

ただ、今僕が「チャットをつくらう」とまつたく思つていないように、あれは僕にとつて「想い出」であり「ヒント」であつて、「結論」

にするようなものではない。やはり、言葉だけの関係というのは十分だ。チャットのように仮想的な場は、場というものである本質を指し示してはいるけれども、やはり人間はどうしても、物理的にも近い空間で、同じ空気を吸いながら《場》をつくらねばいけない。

なぜそう思うのかって、ドラチャはあまりにもあつてなく終わってしまったからだ。インターネットには、引力が足りない。

ドラチャは衰退し、やがて消滅した。本当に楽しくドラチャに通っていた期間は一年に満たないくらい短いものだった。未だにそれが信じられない。何年も通っていたような気がする。そのくらい濃密だった。そのくらい僕はどっぷりと浸かっていたのだ。月に一五〇時間を余裕で使い果たすくらいだから。

ドラチャが終わった理由。簡単にいえば、「利用者のマナーが悪くなった」ということに尽きる。

2ちゃんねるができたのが1999年5月で、その名を広く世間に知らしめたのが2000年5月の「ネオむぎ茶」事件（バスジャック犯が2ちゃんねるの常連だった、というだけの事件）である。今思えば、これがすべての元凶だった気がしてしまう。「インターネットとはそういうところ」というイメージが、これによって流布してしまったのではなからうか、と。

二〇〇〇年のある時期から、ドラチャに「嵐（荒らし）」が来るようになった。最初に遭遇した嵐のハンドルネームは一生忘れないだろう。「生野菜」というやつだった。生野菜。なぜか2ちゃんねるとか猟奇犯罪の匂いを感じてしまう。酒鬼薔薇とかネオむぎ茶に影響された人だったんじゃないかな、とか根拠なく思う。（酒鬼薔薇は人間のこと、野菜って言ってたしなあ、とか。）

明確な悪意を持って荒らそうとはしてはなくても、今の言葉でいえば「メンヘラ」のような人が来たり、いわゆる「空気を読めない」人も多くなってきた。

「場をわきまえない」ような人は僕が通い始めた当初からいるにはい

たが、だんだん来なくなつて、結局は「空気が読める」人ばかりが残った。しかし、「空気が読める」側の人たち（僕のようなユーザのごと）にも反省するべきところはある。淘汰が進み顔ぶれがあるていど固定化すると、常連たちは「自分たちにとって居心地の良い空気」を求めすぎてしまう。つまり、常に流動的かつ柔軟であるべき「空気」が膠着し、凝り固まつてしまうのだ。要するに、僕やほかの常連と気の合わない人間は、入りづらくなってしまう。（現実にもよくあることではないか？）

問題は両側からやって来ていたのだ。「著しく空気を乱す人たちが」が増えていく一方で、「ある空気を良しとする人たちが」がへばりつき続ける。ふまじめな生徒も悪いが、理想を押しつけてくる先生も悪い、という感じである。直接の原因は「悪意を持った荒らし」だったはずだが、原因はそれだけではなかった。自分たち常連が正しかったと思わない。

管理人のとはは、本当に立派なやつで、どれだけ荒らしがやってきても「アク禁にはしない。おれは自分が問題だと思つた発言を淡々と消すだけだ」と言つて、頑として「自然に任せる」という態度を崩さなかつた。当時はそれに憤つてメールを送りつけたりもしたんだけど、その姿勢は今の僕にけっこう大きな影響を与えている。後述する無銘喫茶の店主（当時）も、ともともとと同じ姿勢でお店をやっていた。僕の原点である公園だつて、法律もなければ支配者もない。場というものはそもそも、自然にできあがるもので、自然に変わつたり消えてしまふならそういうものなのだ。そうやって無銘喫茶も変わつていったし、僕が後につくるおぎ研だつて消えていった。

で、その後いろいろと試行錯誤もあつたけど、ドラチャはやがて閉鎖した。

僕はずつと、ドラチャ閉鎖の遠因として「インターネットの大衆化」があると思つてきたし、今もそう思う。お金や知識や技術や好奇心のあるなしがまつたく関係なくなり、いろんな人たちが、どつと流入してきた。EYEがまさにそうだったが、たいていのものは人口が増え

れば頹靡していく。ただ、そればかりではないよな、とも考えるようになったし、そもそもドラチャがそんなに良いものであったか、という疑問も日々強くなる。青春の一ページとして、何よりも大切な《場》の一つであることは間違いないが、あれは結局、練習だったのだ。未来、もつと素晴らしい場をつくりだすための。

それからの高校生活は、自分のホームページと、部活(演劇部)と、受験勉強に力を注いだ。大学に入ってから、似たようなものだった。しばらくは《場》というものとあまり関係のない生活を送っていた。転機は二十歳の時に訪れる。

●「無銘喫茶」に客として通った三年間

二十歳のとき、ヨシで知り合ったお姉さんに初めてゴールデン街に連れていってもらった。新宿にある古い飲み屋街である。記録によると二〇〇五年の七月だったらしい。木曜日だったのは確かだ。当時は水曜と木曜に当時のオーナー(の一人)であるYさんが店長をやっていた。

それから毎週、水と木、とりわけ木曜日はほとんど皆勤でその店に通った。今思えば(これ多いな)二十歳の若僧(しかも新参)が場を汚し続けて申し訳なかつた思いでもないが、この店に客として通った三年間で、本当に本当に多くのことを学んだ。そしてある程度は、自分がある場を汚してしまったのと同程度には、還元もできていると思う。何に還元したって、さあ、何だろう。何かに。《場》という概念にかかわる何かに。たぶん……。

三年通って、その後は僕が木曜を引き継ぐことになるので、あたかも「マークはずす飛びこみで僕はサツと奪いさる」といった風情だ。新参の若僧が、毎週居座って、遂には自分のものにしてしまったのだ。ある見方ではそうなる。いや、どんな見方をしたってそうかもしれない。だけど、僕はそれでよかつたと信じる。そうでなければこんな文章など書きはしない。

原点である公園の記憶と、ドラチャの想い出と、無銘での学びが合わさって、後の「おぎ研」はできあがる。

無銘で僕が学んだことは、いったい何だっただろう。

一言でいえるものでもないが、あえて挑戦してみれば、たとえばそれは「バランス感覚」だ。

当時店長だったYさんは、「客同士のトラブルには介入しない」ということを徹底していた。(少なくとも、客にはそう言っていた。)そして、自分が主役になろうとするとはなかった。もちろん、さまざまな経験や考えを持ち、それを楽しく話す能力に長けた彼は、ときおり個人的な話をしてくれた。でもそれは、場に対して「たたき台」として、あるいは「話題のきっかけ」として、もしくは「なにかの例」として、提出されるものだった。決して「店長が面白い話をした、それでみんなが面白かった」というだけで終わることはないならぬように努めていた、と思う。

Yさんは主役にならない。その場にいる誰かを主役にさせることは、たまにあつたが、それも場のバランスを考えてのことだった、と思う。そう、彼は、確かに場を「回して」いた。客や場を放置することはまづなかつた。あつたとしたら理由があつたはずだ。それでいて、彼はぜんぜん「場を支配」はしないのだ。あれは天才的なところがあつたと思う。

出しゃばらず、といつて放置もせず、静かに適確に場を回していく。そのバランスを、三年間で盗めるだけ盗んだ。僕はそれについて天才ではないので、完全に盗むことはできなかったが、たとえば毎週一回無銘に行つて、週に七時間(ちよつと多めに申告してるけど、週に二回行くことが多かつたしかなりの率で朝までいたので、さして大げさではない)いたとして、それが三年だと、一〇〇〇時間くらい。まあキリよく一〇〇〇時間としましょう。(もちろん一〇〇〇時間と言いたいがために回数と時間を設定しました。)

まあ一〇〇〇時間、控えめに言つても数百時間、僕はYさんが場を切り盛りするところを見ていた。当時の無銘(というかゴールデン街

全体）は一見のお客さんも多かったので、数百人のお客さんと肩を並べたと言っても嘘にはならないと思う。週に三人、初めて会う人がいることは、「Yさんが数百人の人を相手にするところを見ている」わけだし、「場を構成する人間の組み合わせ」で考えると、何千通り、いや何万通りの「場」を経験しているわけだ。これってけっこう、すごいことだと思う。

どんな人たちがいて、どんな場になっても、適切な対応ができる。それが「場を回す」者に要求される能力である。

「場を回す」のに最も簡単なのは、支配者になることである。そういうバーはけっこうあるし、その支配者の人格次第では好きな店になったりもする。しかしそれは決して僕の好きな《場》ではない。もつとやわらかく、変幻自在な場が僕は好きなのだ。

コンセプトや作法がはつきりしていたり、マスターの性格や振る舞いが強烈だったりすると、その店にははつきりとした「色」が出る。その色が好きだとか、馴染めるといふ人だけが、常連になる。Yさんはもともと、店に「色」といふものはつきりつけるタイプの人ではない。そうでなければ「無銘（ノーブランド）」なんて名前の店はつくらないだろう。

カメレオンのように、色が変わる。変えるというよりは、自然に変わっていく。Yさんがどう思っていたのかは知らないが、僕の理想はそれである。だから、出しゃばらず、バランスの調整に腐心する。もちろん、Yさんも僕も個性の強い人間だから、当然色は出てしまうだろうが、少なくとも僕は店に立っていて、あるいは客として座っていて、毎週店の色がぜんぜん違うことを肌で感じてきた。ベースの色は店主の色だったとしても、そこから幾らでも変わっていきける。最初が黒では何色にも変われないが、うすい黄緑くらいだったら、たいていの色にはなることができる。

●「木曜喫茶」店長としての四年四ヶ月

記録によるとYさんは二〇〇八年七月に無銘を去っている。店長としてだけでなく、オーナーとしても退いた。無銘喫茶はもともと二人の人間による共同経営だったのだが、それが一人になった形だ。僕は一日店長として木曜を引き継いだ。

引き継いだ、と言っても、完全に僕一人で営業するようになるまでには紆余曲折があったし、この以前にも月一（のち週一？ よく憶えてない）で火曜日に店に立っていたり、単発で「ドラえもん喫茶」なんてのをやったりしていたので、いろいろとややこしいのだが、ここでは単純に「交代した」という話にしておく。

二〇〇八年七月ということは、奇しくも僕が初めて無銘の土（土？）を踏んだちょうど三年後ということになる。三年の修行期間（主に親方の仕事をそばで見ている）を経て、ようやく一人前といったところ。これから二〇一二年の十一月一日まで、四年と四ヶ月くらい、毎週店に立ち続けた。年末年始も盆もなく、休んだのは二〇一一年の三月十七日だけ。オーナーのほうから「休んでもいいよ」と言われたのである。今思えばやればよかったとも思うが、休んだおかげでできた経験もあったので、良かったと思う。「僕が無銘を休むほどの事態」だったということ、震災の大きさ（当時の衝撃！）もよくわかる。

四年間は、いろんな事があった。日誌でもつけておけばよかったな、と思うが、あとの祭りである。元来記録らしい記録が苦手なのだ。しかしともかく僕の中には膨大なものが蓄積した。その蓄積はもちろん、おご研だとか、僕のあらゆる思考や行動に還元されている。それらを通じて僕とかかわった人たちにも、どこかで影響しているはずである。八時に開店して、できるだけ朝の五時まではやるようにしていた。もちろんそれより遅くまで、時には夕方くらいまで話して、「やばい、金曜の人が来る」なんてこともあった。また計算してみるが、九時間の営業を、二二〇回やっただとすると、えー、だいたい二〇〇〇時間ですね。すごいもんだ。

一〇〇〇時間の修行を経て、二〇〇〇時間の実践。そう考えるとなかなか。ドラチャについても、月に一五〇時間を半年ちよい続ければ一〇〇〇時間になる。空恐ろしい話である。こういうふうを書いてみると、僕が《場》なんつうもんにごだわるのも、ちよつとはわかつていただけるんじゃないでしょうか。

二〇〇〇時間の中で、気をつけていたことは、もちろん色々ある。前述したようなことどももあるが、ある一つには「淘汰」である。

淘汰という言葉は、ドラチャについても使った。ネガティブなニュアンスで。淘汰というのは、身も蓋もない言い方をすれば「不要なものを除き、良いものを残す」ことである。いやあ、本当に身も蓋もない。「来る者拒まず、去る者追わず」が根本ではあるものの、「来た者は一度受け入れるが、作法がなっていないならば改めて拒む」ということも、その「」の内実にはあるわけだ。

とはいえ、「お前みたいなのは二度と来るな！」と言って塩をまく、というわけではない。そんなにヤバイ人はまずいない。濃厚な（僕がそう言いたくなるようなレベルだったら警察を呼んだほうが早いかもしれない。そういうえばYさんも、いわゆる「出禁」は絶対にしなかった。ほかの店で出禁になっているヤバイ人が無銘には堂々と来る、なんてこともあった。そういう人にも彼は適切に（適当に）相手をしていただけから本当に偉い。客としては不快な時もあつたけど、相手だってお客なわけだし。バランスですな。

淘汰というからには、自然とそうなっていくわけである。既に書いたような僕の基本的なスタンス、たとえば「柔軟で流動的な場をめざす」とかいつたことが、そもそも肌合わないという人は、何回か来ても次第に来なくなる。また、何回か来てもなかなか心地よい「色」に巡り会えないという人も、当然来なくなる。結局は僕のやり方にあるていど共感してくれる人だけが残ることになる。

ドラチャの時もそうだったが、この「淘汰」というのは諸刃で、残る人にとっては心地よいわけだが、来なくなる人というのは「必ずし

も心地よくない」から来ない（ことがたぶん多い）わけで、「誰にとつても心地よい空間」とはほど遠い、ということになってしまう。これは場をつくる人は誰もが抱くジレンマだと思ふ。

だから、せめて、淘汰は淘汰でも「優しい淘汰」になるように、一応は気をつけた。無銘・おぎ研を通じて「出禁」を申し渡した相手は、記憶の限り一人もいない。「あなたのためにならないからできるだけ来ないほうがいい」という忠告をしたことはある。客の時代にはいろいろあつたが、木曜喫茶に立つた頃はもう二十三歳で、個人的には「余生」に入っていた（なぜそうなつたのかは直接おたずねください）ので、ずいぶん丸くなつていた、と思う。「丸くなかつたよ！」と思ふのかたがもしいたら、すみません。昔はもつとずつと、トキントキン（名古屋弁）に、尖つておつたのです。

ただ、「この人はちよつとヤバイな」「人格がよくないな」と思う相手には、あまり優しくしなかつた。残酷な話だけど。客だからといって甘やかしたくはなかつた。Yさんはそこそこ甘やかすタイプだつたけど、僕はちよつと違う路線でやりたいと思つていた。

本当にどうしようもない人は本当に「あしらう」ような感じになつてしまうこともあつたけど、「ちよつと問題があるものの、いいやつっぽいし、何よりこの店のことは好きそうだな」という人には、むしろ（僕なりに）優しくなつた、つもりだ。突き放すこともあつたかもしれないが、少しでも「柔軟で流動的な場をつくる」こつを身につけていただくために、言葉を尽くし、また行為を尽くした。なんて言うとか傲慢とか尊大と思われてしまうかもしれないが、「今はまだ難しいけど、できればこの場になじめるようになりたい」と思つてくれる人に対しては、本当に精一杯のことをしたつもりである。できるだけこつそりと。さりげなく。できる範囲で。そういう人間でなければ学校の先生などにはならないし、「尾崎教育研究所（おぎ研）」なんてネーミングはしない、の、です。

淘汰というのは、「不要なものを除く」というところだけ見ると、冷酷なようであるが、「良いものを残す」に主眼を置けば、けつこ

善なることだと思う。「今は悪いけどいつか必要になる」ものは、決して「不要」などではないので、「良くなる」ことによつて、残つていける。じゃあ、みんな「良く」なりやいじんじゃん、って。

そういうことを考えていたように思う。それで結果として、場が健康やかなものになれば、いいなあ。もちろん、僕のお店でいやな思いをした人はたくさんいるだろうし、ぜんぜん好きじゃない、という人もいろいろけど、もうそれは、仕方ないのだ。僕には「めざす」としかできないんだ。好きだと言つてくれる人や、役立つたとか、楽しかつたかと思つてくれる人がいるなら、改良を重ねつつ、続けていきたいと思つている、の、です。

●「おざ研」を営んだ二年九ヶ月

二〇一二年十一月一日、二十八歳の誕生日の日に、「来週からはナシで」と言われた。確か、オーナーが変わつて二ヶ月のことだった。このへんの事情については面倒なので触れない。

それで僕はもちろん迷つた。二十歳から七年以上を過ごした無銘喫茶から追い出されたのだから、別のところで同じことをやろうとは一切、考えなかつた。僕にとつて無銘ほど思い入れられて、大好きで、理想的な場所など、絶対にないと思つたからだ。七年付き合つた恋人が唐突に死別して、いきなり新しい恋はできない。できる人もいるかもしれないし、僕だつてわからないが、しかしその時の僕にはとにかく「別の店に立つ」という選択肢はテンからなかつた。

もう、「人の下で働く」なんて御免だ、と思つた。僕は自分が良しと思う《場》が作りたいのだが、オーナーの意向でそれを潰されたり、ああだこうだ言われるようなら、いい場なんてできっこない。やるんなら、最初つからぜんぶ自分たちでやるなきゃダメだ。上の人の一声で容易に左右されてしまうような《場》は、全然「良し」じゃない。上も下もなく、イチからみんなで作つていけるような場が本当は理想なのだ。

木曜喫茶最終回の日からしばらく、僕はいろんな人に出会つて、考えた。主にこれまで来てくれていたお客さんである。向こうのほうから誘つてくれることも多かつた。みんなが言うことを総合すれば「淋しい」である。「行くところがなくなつた」である。

そもそも僕がYさんを引き継いで「木曜喫茶」を始めたのは、「行くところがなくなると困る」という、まことに個人的な事情が一番だつた。そして、同じように考えている（であろう）お客さんがたくさんいる、ということだつた。この店がなくなれば、常連たちは路頭に迷う。多くの人とはもう二度と会えなくなる。連絡先も知らず、たまにふらつと来て言葉を交わして、また帰つて行く人たち。この場がなくなれば、そういう人たちとお別れになる。そんなのやだ。それじゃドラチャとおんなじじゃないか。そう思つて、引き継いだ。

格好良くいえば、場を守りたかつた。場を守ることで、《関係》をつなぎ止めたかつた。

突然終了を告げられたことで、木曜喫茶で出会つたお客さんのうち何割かは、もう二度と会えない人となつてしまつた。かろうじて連絡先を知っている人たちとも、会う機会はほとんどなくなつてしまう。僕は連絡先を知つていても、お客さん同士は知らなかつたりする。そうすると、その人たちの間にある《関係》は、おそらく永遠に消失してしまうのだ。

それは悲しい。だから、続けたいと思つた。でも、どうやつて？ つつて、答えは最初から決まつていたのだ。実のところ、最終回の終わる朝には、だいたいの構想はあつた、ような気がする。確か。

あとは、「踏ん切り」である。ともかくかかるのは、金。幸いにも当時すこしは蓄えがあつて、そう大金でなければさつと出せる環境にはあつた。とは言つても、である。

僕は「店を開く」ということは考えなかつた。頭にあつたのは「場をつくる」である。我ながら偉いと思うが、閉店を言い渡されて、どうしようと思つたほとんどその次の瞬間に、「店じゃねえな」と思つた。た、たぶん。（この辺はさすがに記憶が曖昧なのでやや適当に書

いています。)

僕は何年も店長をしながら、すでに色々なことを考えていた。まずは「面倒くさい」だ。酒やソフトドリンクや割りものや氷等々を仕入れて、一杯いくらと設定して、飲んだ杯数に応じて金額を要求する。金を受け取る。おつりを返す。こんな面倒なことに金額を要求する。倒なシステムを持つ「店」などというものを、自分でイチから作っていくなんて、到底考えられない。お店がやりたいわけではなくって、場を設けたいだけの僕には、必ずしもその形態をとる必要はない。

そして性に合わないと思うのは、お金に関することである。「何をどれだけ飲んだからいくら」っていう考え方に、まず疑問があった。当時の無銘の料金設定でいうと、コーラを一杯飲んで九時間座っていた人は五〇〇円払い、ビールを十本飲んで一時間で帰った人は六〇〇円を払う。その他の事情をすべて無視して、「飲んだものとその杯数」だけで支払う金額が決まるのである。そんな理不尽なことが、あっていいのだろうか？

また、酒を飲む人の中にも、たくさん飲める人とあまり飲めない人がいる。一杯で満足できるくらい酔っ払える人と、十杯飲んでもあまり酔えない人もいる。六〇〇円で満足できる人と、六〇〇円払っても満足できない人が出てしまうのは、いびつと言わざるを得ない。パツカじゃなかるか、である。

そういう不平等が、許せなかった。そう、ぜんぜん平等じゃないのだ！ 飲んだ種類と量で決まるなら、完璧に平等であるようにも一見、思えるのだが、よく考えてみると変ではないか？ 店にいる時間も、満足度も関係ないなんて！

と言つて、「一時間一〇〇〇円で飲み放題」みたいなのも、おかしい。時間で料金が決まるのだから、平等ではないか。いくら飲んで、飲まなくてもいいのだから、満足度についても是正されるではないか。確かにそう見えなくもない。ただそこには、「時間は誰にとつても同じように、量として平等に流れる」という錯覚、まやかし、ペテン、

虚妄が、あからさまにひそんでいるのである。

時間についての感覚なんて、人それぞれに違うものだし、だいたい時間を金額で計ろうなんてのも愚かしい。「一時間いくら」という設定をしてしまうと、時間はその金額によって縛られてしまう。その金額を基準として、時間に価値がつけられてしまう。時間に価値なんかありますか？ ありません！（断言）

「一〇〇〇円払ったのに五〇〇円ぶんくらいしか楽しめなかったな」とか、「一〇〇〇円しか払ってないけど二〇〇〇円ぶんくらい楽しめた！」とかいう言葉の、空虚なことよ。それに加えて、「いやー、あの一時間は一〇〇〇円どころじゃなくて、五〇〇〇円くらいの価値があったよ。隣の女の子と話は弾んだし、ビールだって八杯も飲んじゃったもんね」とか、「あー！ あの一時間は一〇〇〇円くらいの価値しかなかった！ 時間を返せ！」とかとか。醜いでは、ありませんか。こんなに時間つうもんを馬鹿にした話もない。つか、なんか、貧しいですよ、数字でものを考えること自体が。なに「割り算」してんだよ、と。割り算つてものは、けつこうくだんないんですよ。

「ワイ、六〇分二〇〇〇円で三回できたから、一回につき六六六六六六！一時間に二〇〇〇円払うべきところを、六六六六六六払うだけですんだぞ！ つまり三時間ぶん楽しめた！ と！ いうこと！ キヤッホー！ グヘヘ。ニヒリ。グチャ……ヌメ……」

……まあ、こんなバカな計算の仕方は誰もしなくてもいいんですが、「二〇〇〇円を三で割って六六六六六六」までなら、けつこう多くの人が、やつてると思います。貧しい！ じつに貧しい！ えー、そんなことはさておき。

「一杯いくら」とか「一時間いくら」というふうに、モノや時間を基準に料金を決める、ということをしたくなかった。

とはいえ、お金をとらないわけにはいかないから、何を基準に料金をもらうか。言い換えると、「何について平等な料金を設定するか」。

そこで僕は、「場について平等な料金」というふうに考えて、「席料

のみの店」みたいなものをやつてみたらどうか、と思つたのだ。

席料のみをいただいで、飲むものや食べるものは、各自で用意してもらふ。そうすると、僕は仕入れをしなくても済むし、お客さんも飲み食いするものは実費で買つてくればいいだけだから、安く上がるはずだ。ビール十本飲んで六〇〇円だったところが、同じだけ飲んで、スーパーで買つてきて持参すれば二〇〇円程度になる。席料(おご研では目安を一〇〇〇円としていた)を考へても、半額におさまるわけである。

時間についても、長時間いて席料が高くなることはない。もちろん、後述するがおご研において席料(木戸銭と呼んでいた)はお客さんの自由、つまり好きな金額を入れていいことになっていたので、二〇〇〇円入れたければ入れてもいいし、十分くらいいしかないのに一〇〇〇円払うのがばからしければ、五〇円とか一〇〇円入れてもらえばそれでいいですよ、という、まことに画期的なシステムだったわけである。柔軟で流動的、という根本理念は、お金についても適用したかつたのだ。

木戸銭システムは、かなり早い段階で思いついていた。それを「だいたい一〇〇〇円」とすることも、決めていた。なぜ一〇〇〇円かという、まずは「払いやすいから」である。木戸銭は自由、という前提があるなかで、おつりをもらうのは粋じゃない感じがするもの。

「あ、木戸銭三〇〇円払いたいで、七〇〇円おつりください」つて言うの、なんかかつこ悪いから、それがイヤで来ないって人も、いるんじゃないかなつて。一〇〇〇円だとなんか「払つた」つて感じするし、たいていの人は一〇〇〇円札持つてるし、持つてなければその次は五〇〇〇円なんで、「両替できる？」も言いやすい。

一〇〇〇円つて、ちょうどいい。そう思つて、即断で目安を一〇〇〇円、そこから懐と気分に応じて増減してください、つていうことにした。

さて、無銘をやつていた感触からすると、一晩に来るお客さんは何

もない日で十人くらい。一〇〇〇円ずついただければ一〇〇〇円ほどの木戸銭が入つてくることになる。仕入れをしないため支出はさほどなく、調子のいい月は四〇〇〇〇〜五〇〇〇〇の木戸銭をほとんどそのまま家賃に回せる。初期投資ははじめ電気代や水道代、細々とした出費(水買つたり)もあるが、ある程度は赤字でも気にしない。(ゴールデン街で一晩飲んだら数千〜一万円はかかるんだから、月に二〇〇〇〇円くらいまでのマイナスはさほど痛くない、という考え。)

つてことはまあ、毎週やるなら家賃四〇〇〇〇〜五〇〇〇〇のところがあればベスト。木曜以外にも土日、適当に貸し出したりすればいい。ということで、新宿駅から徒歩圏で探したのだが、これが見事に、いい物件に巡り会えた。家賃四二〇〇〇円。電気代と水道代を合わせても五〇〇〇〇円におさまりそうだ。

ただし、安いのは理由があつた。二〇一五年八月末をもって、建物そのものが取り壊されるそうなのであつた。二年と九ヶ月後。

これを僕はポジティブに捉えた。逆に考えれば、ずっと続けなくていい、ということである。それが何を意味するのかと言えば、「カウンターや椅子はへボくてもいい」だ。三年保つクオリティのものでいいのだから、安く済ませられる。十年、二十年やるとなつたら、色々気合を入れなければならぬのだが、最長でも三年となれば、色々と雑にやれる。

また、取り壊すと言うことは、「何をしてもいい」ということ。壁に穴を開けようが、落書きしようが、敷金は(ほぼ)全額返つてくる(はず)なのだ。

というわけで、その部屋を借りることにした。

四階建ての古いマンション。何部屋か空いていたのだが、最上階の、いちばん奥の部屋に決めた。カウンターを設置しやすそうな間取りだったのが最大の理由だが、やはり、いちばん上の、いちばん奥というのが最高だ。なんとも怪しい雰囲気があるではないか。それに、絶対に誰も扉の前を通り過ぎない。用のある人だけが、ここまでやつてくる。誰にも邪魔されない。とても良い。

椅子だけでこれは痛い。

というわけで考えたのは「元氣玉」方式だ。言わずと知れた『ドラゴンボール』に出てくる技の名前だが、要するに「みんなに一脚ずつ買ってもらおう」という話。Amazonで椅子を選び、ネットに貼って、「これを買って、こちらの住所に送ってください！」と頼んだ。

無銘時代のお客さんを中心にあれよあれよとご賛同いただき、あつという間に十五脚ほど集まった。本当に本当に感謝しております。(ウェブ版注…このうち七脚は、現在夜学バーに保管されています。)

家具やら食器やらは、いろんな人から寄付していただいた。冷蔵庫も、電子レンジも、炊飯器も、電気ケトルも、本棚も、トイレの鏡も、まな板も包丁もグラス等々も、あらゆるものももらい物で、自分で買ったのはカーテンくらいだった。そのカーテンも、店じまいする布団屋さんから激安で買い取ってきたものだ。その他こまごまとしたものは自分で買いそろえたが、さしたる出費ではなかった。看板は余った木材にマジックで書いたもので、僕でなくお客さんの字である。

一二月三日、おぎ研設立後はじめての木曜日がきた。「おぎ研」は場所の名前なので、木曜日の集まりのことは何と呼ぼうか？ いろいろ考えたが、まあ別に何でもいいやということで、暫定的に「木曜□」とした。喫茶ではないので、何かべつの言葉をなんでも入れてくださーいという意味で、□(しかく)をつけた。(後に「木曜喫茶」と呼ぶようになる。)

木曜□は、毎週木曜の夜七時から、だいたい朝方まで開いていて、木戸銭(目安は一〇〇〇円位、懐や気分等諸々の事情に応じて)を払っていただけなら、その場にあるあらゆるものが食べ放題飲み放題になる、という単純なシステムである。余裕のある人や、おすすめのお酒やなんかがある人は、焼酎やらウイスキーやらリキュールやら、あるいは日本酒やワインでも、なんでも持ってきてもらおう。持ち込んだものはおぎ研にストックされて、翌週以降も飲み放題となる。誰が持ってきたものを、誰が飲んで構わない。たくさん飲む人は自分でい

いちこの一升バックでも用意してもらえれば、遠慮なく延々それを飲んでいてもらえればいい。なんとも優しいシステムであることよ。

ビールはすぐに減るからいちいち持つてくるのが面倒だし、飲みたいたときに飲めないというテンションが下がる(替えが効かない!)ため、「ビール募金」の箱(実際は筒だった)を設置してビールを飲みたい人にお金を入れてもらった。お金がたまったら、ビールを大瓶でワンケース(二〇本)注文して、業者(カクヤス)に持つてきてもらおう。一度ケースを入れてしまえば、あとはだいたい自分が飲んだぶんだけ(つまり実費ぶん)入れてもらえれば、ケースが空っぽになるころにはもう一度注文できるだけのお金が貯まっているというわけである。なんとも画期的なシステムや!

(要するに、「持ち寄りの飲み会を毎週やる、会費あり」ってこと。)

木戸銭の金額も、持ち込みの飲食物も、懐具合や趣味や性格や、なんやかやの各々の事情や都合によってそれぞれに違う。毎週のように木戸銭を払わずに帰り、しかしときおり一万円札とかを投入していく、なんて若者もいた。毎回二〇〇〇円入れてくれる人もいたし、毎回五〇〇〇円入れてくれる人もいた。正直、そういう人によって成り立っていたところはあつた。おぎ研という《場》に対して、その志を買ってくれて、支えてくれる人は金額にかかわらず本当にたくさんいて、忙しくてもちよつとだけ顔を出しに来るとか、ささいなことでも本当に嬉しかった。

反対に、ほぼ毎回お金を入れない人もいたし、木戸銭の入れ忘れも多かった。伝票も当然ないし、木戸銭を入れてもらうタイミングも特に決めなかったので、システム上忘れやすいのは間違いない。木戸銭箱には「来所時に!」と書いたが、よく考えればそれだと金額を考慮することができない。はじめからいくら払うと決めている人は来所時に入れてくれればいいが、「うーん今日は楽しかったし一五〇〇円!」というふうにやりたい人は帰り際に入れたいだろう。では帰る時に入ってもらおうにすればよかったのかもしれないが、酔っ払っている場合もあるし、「いつでも来られていつでも帰れる」のがコンセプト

の一つでもあった。これは「原点」である公園と同じだ。帰り際に必ずすべき作法があるのは、嫌だったのである。何か決め事がある、ということ自体が嫌だった。また、「木戸銭を払ってください」というのも嫌だった。「木戸銭を入れない権利」というのを認めていたつもりはないが、「木戸銭を入れる義務」には絶対にしたくなかった。

はつきり言つて僕は、名古屋人だし、お金のことにはけつこう敏感である。誰がいくら入れたか、というのは（わかつたとしても）一瞬にして記憶の奥へ封印することにしてしたが、誰が入れなかつたか、というのはすべて認識していた。何割かの場合は「入れ忘れましたので次回に！」と連絡が来るか、でなくとも次に来たときに多めにに入れてくれた。そうじゃない場合は、「あ」と思つて、それでおしまいである。だからどうということはないが、まあ、「あ」とは思う。

衝撃的なことを言うと、二年九ヶ月やつた感触としては、木戸銭を入れない（入れ忘れてそのまま入れない）割合はだいたい一割くらいだと思ふ。二割くらいじゃないかと疑いもするが、さすがにそこまでではないだろう。全員入れる日がまあ普通だが、十人来て五人しか入れてないこともあったので、ならして一割くらいかなと。木戸銭システムはよくできているし、僕の考え方も殊勝だと思ふが、実際お金は集まりにくく、完璧なわけでは全然ない。でも、そういう「雑さ」を引き受けてこそ、あの空間だったつてのはきつと間違いないから、当時も今も、「別にそれでいい」と思つている。そういう「ゆるさ」があつたから、それが許されていたからこそ、おぎ研はおぎ研であることができた。そもそもビジネスじゃないのだ。

二年九ヶ月、実にさまざまなことがあつた。記録をつけていないのは相変わずで、すべては優しさの中へ消えていったとき。簡潔に言えば、僕としてはおぎ研は成功しすぎるほど成功した。ろくに宣伝もせず、ほぼ口コミのみで、たぶんあわせて二百人くらいは来た……かな。どうなんだろう。最低でも百人はいたはずだ。いろんなことがあつて、傷ついた人も、不快だった人もいただろうが、考えられること

をすべて考えてみた上で、「やつてよかつた」と思う。

例えば、あの重い扉を開いて、勇気を出してやつて来てくれた若者たち。もしそれによつて何か大切なものにとどり着けたのだとしたら、その踏み出した一歩は本当に偉大だと思ふ。不親切なホームページ。治安の悪そうな路地の怪しげなビル。雑居ビルの最上階の一番奥で、板きれにマジックで書いた看板だけ。扉が閉まつていれば中の様子はいつさいわからない。近くまで来て引き返したという人は、ひよつとしたらけつこういたのではないだろうか。実際、「ドアを開けるまで五回くらい階段を上り下りしました」なんて証言もあつた。

あのドアを開けることで、誰かの何かが少しでもよくなつたとしたら、それだけでおぎ研は意味があつた。そう思いたい。もちろん、誰かの何かがいくらか悪くなつたこともあつただろう。それを天秤にかけてどうだと言ふことはできない。ただ誰もがしあわせになることを祈るだけだ。人を不幸にさせるかもしれないからと、何もしないではない。確信などなくても祈りながら何かをしたい。無責任だと言われようが、祈り願ひ動くことをやめるのは、……だつて「つまんねえじゃん」、つて、本音の本音はそういうことです。

その扉を開ければ、そこには人がいた。少なくとも僕がいた。複数の人と人の関係の中で、様々なことが起きた。それは本当に面白かつた。誰かにとつては遊び場だつた。誰かにとつては学びやだつた。誰かにとつては実験室だつた。誰かにとつては休憩所だつた。誰かにとつては戦場だつた。誰かにとつては処刑場だつた。……常に遊び場であることもなければ、常に処刑場であることもなかつた。それは刻一刻とめまぐるしく変わつていった。その場にいる人の意志によつて。あるいは積み重なつていく言葉によつて。それはチャットの流れに似ていた。

そんな場へ行くことは博打かもしれんが、金は賭けない。肉体と精神の内の何かを賭ける。賭けて、負ければ、傷つく。

たぶんある程度はちゃんとそういう場になつていて、だとしたらちよつと誇らしいような気もするし、「面白い」。

おぎ研は二〇一五年八月三十一日をもって終わった。とつくに取り壊され、もう跡形もない。最後の半月はほぼずつとおぎ研にいて、鍵も開けつ放しにして、来たい人が適当に来るような感じにした。名残を惜しんだ常連さんたちが連日遊びにきてくれた。『がくえんゆーとぴあ まなびストレート!』などいろんな上映会をしたり、ドラクエ2やマリオでひたすら遊び続けたりした。

二二日にカウンターを壊した。自分で作つたものを自分で壊すのは愉快だった。作つた時は三人だつたが、壊すときはなんだかたくさんがいた。ああ、長く使つたモノに神が宿るとはこういうことなのかと思つた。その事実だけでおぎ研が存在した意味はあつた。

汗を流して、のこを引いたり、ものを運んだり、真夏で暑かつた。二三日以降は少しずつモノを片付けながら、カウンターもないだつた。三日以降は少しずつモノを座つてひたすら酒を飲んだ。釘が落ちていた。ストックしていたすべての酒を飲みきろうと言つて、本当になくなつた。粗大ゴミを捨てるのにも金がかかるので木戸錢箱を置きつ放しにしていたら、最終的に七万円くらいになつていて、笑いながら片付けをしていたら、確か最終日の昼間だつたか、その入つた財布をなくした。たぶんおぎ研の前の粗大ゴミの上か何かに誤つて置いてしまつたのを盗まれたのである。みんなのお金がわや(名古屋弁で台無しの意味)になつてしまつたということで、申し訳ない気持ちもあつたけど、もう笑うしかなかつた。財布はおぎ研とともに消えたのだ。夏の終わりと共に、すべてなくなつた。もちろん返つてなどこない。すがすがしいもんじゃないやねえか。

号泣しながらクレジットカードとかを全部止めたら、大事なカードはすべて自宅に保管されていた。バカじゃねーのと思つて、ほんとに呆れた。アーみんな終わつたと思つた。でも粗大ゴミを捨てるお金がなくて、おぎ研の備品は未だにほとんどペランダにある。

最終日の夜は何人来たかわからない。賑やかだつた。人生を花火と言うなら、あれも花火の一種だろう。

●二秒で終わる焼き鳥バーの話

「またお店やんないんですか?」と死ぬほど聞かれて、「やりたいけどさー」と曖昧な返事をしていたら、「うちで働けば? 木曜任せるよ」と言われた。ゴールデン街の、なんと無銘喫茶の隣のバーだという。なんとという奇縁。おもしろいやんけ。それならと心が揺れたところで、九月初の木曜といえば、三日とわかつた。ドラえもんの誕生日やないか、それなら、と、ちよつとしたモラトリアムとしてとりあえず働いてみることにした。楽しかつたし、ためになつたし、お金ももらえたけど、忙しくなつてきたのもあつて十月いっぱいで辞めた。誕生日直前というのもちよつとよかつた。

やつぱりおぎ研をやつた後に、「オーナーや店長のいる店」で働くのは辛かつたし、「何をどれだけ飲んだからいくら」という考え方も、相変わらず身に馴染まなかつた。やつぱり僕は僕なりのやり方を考えなければいけないと思つて、そのままそれから一年弱。

●新しい場所の試み「ランタンぞね」

えー、今日は二〇一六年八月二七日です。とキムタクの名言(?)を模してみました、時が経てばなんのことやらわからなくなることでしよう。二〇一六年は一月にSMAAP解散疑惑の報道があつて、八月にSMAAPが年内に解散すると決まりました。その他にも既にいろいろと凄い年でございます。また四ヶ月あるのが気が抜けなけれど、十二月三日でSMAAPは解散するというので、そこへ収束する一年なのかなという予感もあります。SMAAPに始まりSMAAPで中継ぎしSMAAPで終わる。SMAAPすごいなあ。

いやSMAAPは関係ない。本文と関係ない。

本題。

八月二三日でおぎ研も一周忌を迎えるので、そろそろ新しい《場》

をやってみようと考えております。新作小説を書こう書こうともがき苦しんでいるさなかの八月二五日に急に思いつきました。名前もすぐに決まりました。「ランタン zone」にします。

第一回は九月三日土曜日、ドラえもん誕生日です。

十五時から嫌になるまで(可能なら終電くらい)やります。

場所は今のところ、新宿中央公園の「富士見台」を予定しております。「新宿中央公園」でグーグル画像検索すると地図が出てくると思いますので、そちらをご参照ください。

当日、思いがけない事態(ホームレスに占拠されているなど)が発生した場合は、ツイッターで場所の変更をお伝えします。おざ研(@ozakenjo) のアカウントが @aritenzone に変わっておりますので、すでにフォローして下さっている方はそのままご覧いただけます。基本的には事前に告知した場所の周辺にいると思うので、ランタンを探していただければ見つけかるのではないかと……。

ランタン zone (ランタンぞね) とは、いったい何かといえますと、《場》のつもりです。

「おざ研みたいなことを野外でやろう」というのは何年も前から考えていたのですが、「何かが足りないな……」と思つて、実践はしませんでした。花見や月見はたびたびやりましたが、おざ研のような《場》とはまったく違う、単発のイベントとして捉えておりました。

八月の頭に六甲山に登つて、そこに住んでいる友達と話したのが改めて考えるようになった転機です。

「ジャッキー、いまはお店やってないの？」
「もうお店やらないの？」

たくさんの人から何度もいただいた質問でござりますが、「やりたいけどいい物件がない」「一人じゃ難しいから今は仲間を探している」というのがおさまりの返答になっております。それは確かに本当のことだけど、もしも次にどこか物件を借りるとしたら「お店をやらない」というふうと考えているので、それとは別に「お店以外のこと」

をやつてもいいかな、とは心のどこかで考えておりました。

六甲山の上に住む友達は、昼時になると山を下りて、三ノ宮やポーランドとかでカレーを売っております。自動車を使った移動式店舗です。おもしろいことをやっています。

こないだその彼女が言った言葉で印象的だったのは、「メニエーがなければお店ではない」という一言。ほんとかどうかは知らないが、だとしたらおざ研は立派に「お店ではなかった」のだ。

彼女は「場所がなくても場所はできる」ということをたぶんいつも考えていて、そういうものにアンテナを張り続けているし、僕より一歩先で実践してもいます。

彼女は法律とか常識よりも「楽しい」や「面白い」を本気で、胸を張つて優先できる人で、会つて話すたびに「この子と友達でよかったな」と思われます。カレーもおいしいです。神戸に行つたらぜひ。

場所はなくても場所はできる、人がいればどこでも場所になる、そんなことはもうわかっているというか、当たり前のことなのですが、何かもう一押しがない。何か一つ、要素が足りない。

それで三週間ほど考え続けて、ポンと出たのが「ランタン」という発想でした。

川本真琴さんに『縄文』という名曲があつて、「相談したい 縄文の人々を呼んで 毎晩やぐらを囲めばわかるかもしれない」と歌われます。昔の人たちは火を囲んで生活をしていたと思われれます。火のあるところは《場》になりました。まともな建造物のなかった時代は場といえばつまり火のことを指していたのかも知れません。

現代では火を焚くとだいたいどこでも怒られますし手間もかかれば後片付けも大変なので本当に特別なイベントでもなければ火を囲むことはまずありません。でもランタンだったらいつでもどこで点けていてもたいがい怒られないでしょう。「あ、もうこれでいいじゃん。やろう」と思つて「ランタン」という言葉の思いついた五分後にはもう Amazon でランタンを物色し注文を済ませておりました。本日届きます。

ランタンzoneとかいうまだよくわからない《場》は要するにランタンを囲んで立ったり座ったり話したり何かを飲んだり食べたりする会のことです。ランタンは「ジャッキー・O・ランタン」とでも名付けて永くかわいがりたいと思っています。僕はハロウィーンの翌日であつて前日がハロウィーンであるようなハロウの日すなわち十一月の一日に生まれておりますしあだ名もジャッキーなのでちょうどよろうと思われます。

「えつ、野外でやるの？」と不安に思われた方。僕も不安です。でもまあ、やってみましょう。とりあえず週に一日くらいで。

これからだんだん寒くなり、十一月になると少なくとも日が落ちてからの野外催行は不可能なので、十月三十一日の夜に凍えながら僕の誕生日をしめやかにお祝いしていただいたあととちよつと冬眠すると思ひます。

ところがランタンの凄いところは、それが大学のラウンジであろうがサイゼリヤの五番テーブルであろうが、どこだろうが置いてしまふし暗めになら点灯もできるだろうとところです。ランタンのあるところが《場》になるのならば、屋外だろうが屋内だろうがどこでもそこは「ランタンzone」。歩いていて「ランタンzone」。

こんな思ひつきにどのくらいの人が参加してくれるのかは知りません。「ついにアングラになつてしまつた……」とお嘆きになる方もあるでしょう。でもランタンzoneは有難いことにいつでもやめられます。初期投資はランタンの数千円のみです。「なんか違うな」と思つたらすぐに辞めて何事もなかつたようにツイッターアカウントも非公開にするでしょう。

神出鬼没、ヒットアンドアウェイ、蝶のように舞い蜂のように刺す、そんな雰囲気であつてくらやつてみます。

詳細は今のところこのように考えています。

- ・ランタンを置き、そこを場の象徴とする
- ・木戸銭システム採用（五〇〇〇〜一〇〇〇〇円位を目安）

・飲食物は持ち寄り

・紙コップや氷、水、それまでにストックされたお酒などは用意する
・できるだけアクセスがよく、屋根のある場所を確保する（情報求む）

考えていることはこのくらいで、理念的にはおざ研とほぼ同じだし、あとはやっているうちに思いついてくるでしょう。

木戸がないのに木戸銭と呼び、事実上の席料を設定するのは、《場》にお金を出す、という感覚を強調したいからです。価値とか意味とか、もしかしたら場というものにしか宿らないのかもしれない、とさえ思うことがあるので、そうします。

しばらく続けたらみんなランタンのことが好きになるよ。

●ウェブ版の補足

「夜学バー」が生まれるまでには、以上のような流れがありました。ランタンが冬眠に入つた次の春には「お店」が始まつているとは、これを書いた時点では露も思つていません。

夜学バーは「お店」なので、「何をいくら飲んだら何円」という制度ですが、僕なりにバランスをとりながら、システムやコンセプトを考えたつもりです。そのへんはホームページにも書きました。

ともあれ、百聞は一見にしかず。興味がありましたら、ぜひ一度。

夜学バー番頭のジャッキー